

---

# 紅の平原と蒼の騎士

緋炎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

紅の平原と蒼の騎士

### 【Nコード】

N3882G

### 【作者名】

緋炎

### 【あらすじ】

ごく普通の高校生だった筈の瀬戸和樹は落雷によって異世界『シユトラーゼ』へと転移してしまう。この世界で仕事を見つけ何とか生活を始めた和樹だったが、いつもよりも少し遅く家へと帰っている途中、謎の男と少女との闘いを目撃する。闘いは引き分けに終わり、男が逃げる際に和樹は顔を見られてしまう。男と戦っていた少女は『いままでと同じ生活をしていれば消される』と告げ、半ば強引に和樹を街から連れ出す。こうして2人の、世界の命運を賭けた逃避行が始まるのだった。

## 序章 紅の荒野

そこは、果てしなく続く荒野だった。

かつては緑生い茂る平原であっただろうそこは、今となつては無残にえぐり取られ、破壊されつくした荒野に過ぎなかった。

地面は赤く染まり、無惨に砕け散った何かの残骸が荒野を彩っていた。

残骸の正体。

それは、とある生物の肉体の一部だった。

この荒野で生きている者はたったの2人。

しかし、その2人も致命傷を負っており、死ぬのは時間の問題だった。

2人はこの地獄をくぐり抜けた戦友であり、そして、永遠の愛を誓い合った恋人だった。

しかし、恋人らしい行為など殆どしていない。

何度かキスをしただけ。

そのキスだって恋人とするような激しいキスなどではなかった。

2人にとって、恋人としての時間が殆ど与えられなかった事だけが

心残りだった。

死ぬことは恐れていない。

2人一緒に死ぬるのならば、これ以上の幸福は存在しないだろう。

2人はまだ少年、少女と呼ばれる程の年齢だった。

決して、数え切れない程死線をくぐり抜けてきた屈強な戦士などでは無い。

体格も歳相応の平凡なもの。

街中で見掛けても気に留める事は無いだろう。

それが、2人がここにいることの不自然さ、異質さを象徴していた。

ここはつい少し前まで地獄だった。

実戦経験豊富な傭兵でさえ、数分と持たないであろう程の。

何故生きているかなど、本人たちも分かっていただろう。

生きている事が信じられない程の地獄だった。

2人に分かっている事は、もうすぐ自分たちが死を迎える事だけだった。

2人にとって僥倖だったのは、最期の別れの挨拶が出来ることだ。

2人とも、もうすぐ死を迎えるが、言葉を交わすだけの猶予が与えられた事を喜んでいた。

「――」

少女が自らの隣にいる少年に話しかける。

少年は少女の言葉に頷くと、体を少女の方向に向ける。

少しの間を置いて、自らの顔を少女へと近づけ……少女の唇に自分の唇を重ね合わせた。

これまでに幾度とした行為。

それが数十秒続き、名残惜しそうに少女と少年は唇を離れた。

ついに限界を迎えたのだ。

願わくば、次に目を覚ました時もこの世界にいますように。

2人はそう願いながら、血に染まった大地へと倒れ込んだ。

そして、この荒野の中で動く物は消滅した。

## 序章 紅の荒野（後書き）

別の連載があるので、更新速度は1週間に一度程度になる可能性が高いですが、どうかよろしくお願いします。

## 第1話 日常の終焉・雷

「暑いな……」

夏休みを目前に控えた七月の空の下を、一人の少年が気だるそうに歩いていた。

彼の名前は瀬戸和樹。

自称・『ごく普通の高校二年生』だが、街の不良集団と仲良くしているため、当人以外は『普通の高校生』とは思っていないかったりする。

ただ、不良と仲良くしているのに成績だけは何故か良く、怒るに怒れない教員たちは和樹を目の敵にしている。

今日は期末テストの結果発表日で、明後日には一学期の終業式を迎え、終業式が終われば夏休みに入ることになる。

和樹は夏休み初日からスイスで暮らしている叔父の家まで避暑に行く予定だったため、終業式を心待ちにしていたのである。

和樹の通う高校は家から歩いて30分から35分程度の位置にある。高校の近くは再開発区域に指定されていて更地となっているため、日光を遮る物は何も無く、屋上で料理が出来た、と言う逸話まである程だ。

授業中に生徒が熱中症で倒れて救急車で運ばれた事件の後、やつとの事で全教室にエアコンが設置されたのだが『電気代節約』云々の理由によってエアコンが稼動するのは午前11時から午後3時までの4時間、気温が30度以上の場合のみであり、役に立っているのか良いのか良く分からない代物だった。

和樹は少し前まで通学に自転車を使っていたのだが、坂道で中年の女性が運転する自転車に側面から衝突され、大破していた。自転車ならばさほど暑く感じない通学路も、歩いた場合は背中を炎で炙ら

れているかのような感覚に襲われる。

今日の最高気温は34度らしいが、朝早くでこんなに暑いんだから40度近くまで上がるような予感もする、そう思うと和樹の足は鉛になったように重くなる。

ゆっくりと歩けば余計に苦痛が長引く事は知っているのだが、その重さを振りほどいて走る気力が出ない。

携帯で仲の良い不良に電話をして原付でも廻して貰おうかとも思ったが、生徒指導部行きになるのが怖かったので止めた。

「くそ……」

目の前が真っ暗になってきた。

陰があればなんとかなるのだが、ここは街路樹の一本も無い更地だ。「目眩が……」そして、和樹は地面へと倒れ伏した。

「う……ん？」

突然の頭痛に襲われて目を開けると、そこは学校の保健室だった。強烈な消毒液の匂いが鼻をつく。

「大丈夫？」

右隣から声が掛けられる。

顔を向けると、そこにいたのは20歳中盤の女性、この高校の保健医だった。

和樹はこれまでに数度しか見掛けた事は無かったが、クラスメイトたちが美人だと騒いでいた事は覚えている。

彼女はたしかに美人だった。

消毒液や頭痛のせいかもしれないが、噂するだけの事はある。

「何でこんな場所に？」

家を出て少しした後の記憶が無い。

何故ここにいいのかを考えれば考える程、頭痛はひどくなってくる。そこで保健医が状況を教えてくれた。

「貴方、1時間くらい前に道路に倒れてたのよ。3年の生徒がここまで運んでくれたわ。多分、日射病ね。診たところ特に異常は無いから、ここで休んでおけば大丈夫だと思うけど、一応病院に行っておく？」

その言葉で自分が通学途中に帰る途中に倒れた事を思い出した。

「大丈夫です。少し頭が痛いだけですから」

和樹は痛む頭を押さえながら言った。

「本当に大丈夫？」

保健医は頭を押さえている和樹の姿を見て『大丈夫』と言う言葉が強がりに見えたようで、心配そうに聞く。

「大丈夫です。もう少し休めば頭痛も無くなると思いますし」

それに対して和樹は先程よりも強い口調で答える。

「そう。分かったわ。なら、これに名前と学年とクラスを書いて頂戴」

保健医は小さく溜息をついてA4サイズの紙と下敷きを取り出し、和樹に渡した。

どうやら来室者を記録するための紙らしい。

項目は氏名、学年、クラスと症状、処置方法、入室時刻と退室時刻。症状の欄には既に『日射病』、入室時刻の欄には8時20分と書き込まれていたが、名前欄などは白紙の状態だった。

名前などを書き込み、保健医に渡す。

「いいわよ。私は少し職員室に行くから、もし治ったのなら退室時刻を書いて授業に行って頂戴」保健医は早い足取りで保健室から出て、職員室の方向に歩き出した。

それから30分後に和樹は起き上がった。

既に頭痛も止み、完全に回復している。

机に置いてあった紙に退室時刻を書き入れ、保健室を後にし、教室へと向かう。

窓の外を見ると、少し前まで晴れていた空は、暗雲がたちこめ、今にも雨が降り出しそうな天気になっている。

「雨、降らなきゃいいけど」

和樹はそう呟きながら2年3組の教室に入った。

特筆すべき物など何も無い、普通の1日だった。

友人たちとの馬鹿話に花を咲かせたり、弁当の争奪戦をしたり。本当に、普通の1日だった。

そして、下校時間を迎える。雨は少し前までは小雨にだったが、また本格的に降り始めようとしていた。

出来るだけ早く帰ろう。

そう思いながら、和樹は走って学校を出た。

長い長い道路を走る。

道路は更地から泥が流れ込んで来たのか、底無し沼のようにぬかるんでいる。

泥が跳ね、制服の黒ズボンを薄茶色に染め上げていく。

和樹の足は更に加速する。

『早く家に帰らなければ取り返しがつかない事態になる』

そんな強迫観念に捕われたのだ。

雨が降っただけで何故取り返しのかからない事態になるんだ？

和樹はそう考えてスピードを落とそうとするのだが、足が言うことを聞かない。

更に加速していく。さながら親が交通事故にあって危篤状態である

ことを聞かされた子供のように走る。

止まらない。

必死に止まろうとしても止まらない。

恐らく、一種の金縛り状態なのだろう。

脳は足に停止信号を送るが、足がその信号を受け付けられないのだ。  
更地の終わりが見えて来る。

この先は住宅地だ。

あと数分程度走れば家に着く。

帰ったら、まず身体を洗って、水を飲もう。  
もう汗でびしょびしょだ。

しかし、和樹の素朴な願いが果たされる事は無かった。

和樹の周囲を強烈な光が囲んだのだ。

数瞬後、和樹の身体は完全に消滅していた……

それは、一筋の光だった。光は、大砲を撃つような轟音と共に、再開発区域の西端に炸裂した。

それは一瞬でアスファルトの道路を焼き尽くし、再開発区域と住宅地を分けていた鉄柵を焼き切り、溶解させた。

そして、その近くにいた一人の少年を跡形も無く消滅させた後、光は破壊の爪痕を残して消失した……

## 第1話 日常の終焉・雷（後書き）

保健医と言うのは正式な名称では無く、正式には養護教諭と言うらしいですが、どうやらこちらの方が浸透しているようです。『保健医』と言う名称を使わせて貰いました。誤字・脱字の指摘や評価・感想お待ちしております。

## 第2話 異世界・転移

「ん……？」

目が醒めた瞬間、おかしい感覚が背中から伝わってきた。

少し水を含んでいて、柔らかい『何か』。

和樹は『家にこんなベッドあったかな』と疑問を感じ、明らかに部屋にあつてはならないものが在ることに気が付いた。

太陽。

部屋の中に太陽がある筈が無い。

「外で寝ちゃったのか？」

首を傾げる。

それもおかしい。

少し前まで雨が降っていた筈だし、真夏の暑さを全く感じない。

そもそも、住宅地の中には空が広すぎる。

再開発地域は……確かに広いが、草など生えていない。

和樹が感じた感触。

それは、草の感触だった。

辺りを見渡してみる。

そこは、草原だった。

地平線の遙か彼方へと続く広大な草原。

ここまでの大草原となると、それこそ北海道くらいしか有り得ない。だが、何故こんな所にいるのだろう。

それを考えた瞬間和樹の頭の中にあの光景がフラッシュバックする。

自分を包んだ光。

あれは一体、何だったのだろうか。

ほぼ間違いなく、自分がここにいる原因はあの光にあるに違いない。  
「ところで」

和樹は立ち上がりながら呟く。

「ここは一体、何処なんでしょう？」

原因が分かってても、自分がいる場所が分からなければ意味は無い。  
とにかく、ここで寝転がっているだけでは事態の好転は見込めない。  
ここが何処か分かるような場所さえあれば帰る方法も明らかになる  
筈だ。

公衆電話があれば家に電話して迎えを寄越して貰うことも……

「携帯だ」

簡単な事だった。

和樹の持っている携帯電話は全世界での通話が可能なタイプ。

つまるところ、ここが北海道であろうと、モンゴルの大平原であろうと、オーストラリアの草原であろうと、絶対に通話が出来る筈だ。  
あとは電話をかけるだけ。

しかし、ディスプレイに表示された文字は無情にも『圏外』の2文字。

「何で？ ここ、トンネルでも無いし山奥でも無いよ。そんなの無しでしょ？」

携帯に向かって囁きかける。

しかし、圏外は圏外。

表示が変わる事は無かった。

そこから導き出される答えは……

「とんでもない僻地？」

ロシアの内陸部か、モンゴルの西部辺境地帯か、はたまたメキシコか。

とにかくとてつもない僻地である可能性が高い。

この温度を見る限り、メキシコは無い。

ならばロシア内陸部かモンゴルか中国北西部などだろう。

それで納得していただろう。

太陽の隣に有り得ないものが無ければ。

それは、大きな光だった。

太陽の10分の1程度の明るさで輝く、昼でも簡単に見付けられる星。

大彗星などは稀に昼間でも肉眼で確認出来ることがあるが、太陽の近くで、ここまで大きな光を発する天体など和樹が知る限りでは存在しない。

「つまり……ここは、地球じゃ無い？」

その光は全く動かない。

彗星や人工衛星の墜落なら移動が観測出来る筈だ。

それが動かないと言うことは、この光が恒星である事を示していた。ただ、もしかするとこの地域のみで見える特殊な星と言う可能性も有り得る。

まだ決定的な証拠は見付かっていない。

和樹はそう思っただけで現実逃避するしか無かった。

「とにかく、動かない事には始まらないか」

ここがどこであろうと、夜になるまでここにいる訳にはいかない。

「そういえば、鞆、どうなったんだろう」

辺りを見回しても鞆は見つからない。

どこかで落としたのかもしれない。

そう納得して、和樹は太陽の方向へと歩きはじめた。

しかし。

「何にも無え……」

2時間が経過し、日も暮れてきたと言うのに、景色は一向に変わらない。

1つだけ変わった事があるとすれば、いま歩いている場所が草の上では無く、土の上だと言うことだけだ。  
どうやら街道らしいが、自分以外誰も通る様子は無いし、これまでに2つ標識を見付けたが、どちらも理解不能な別言語で書かれているため、この道がどこに繋がっているのかも分からない。  
ただ最低でも、ここが外国である事だけは分かる。  
街道に入っても携帯の表示は圏外のまま。  
日が暮れば何が起こるのか分からない。  
完全な八方塞がり状態で、和樹はただ足を進める事しか出来なかった。

さらに2時間が経過し、ついに光が見えてくる。  
だが、それは和樹の期待を大きく裏切る物だった。  
強固な石の城壁に包まれ、城門は堅く閉ざされている。  
門の前には板金鎧を着込んだ歩兵が警戒に当たり、城壁の上では松明に明かりが燈され、弓兵が遙か彼方の地平線を鷹のような目で睨んでいる。

それは、すなわち。

「中世、ヨーロッパ……？」

呟いてすぐに、それも間違いであることに気が付いた城壁にはびっしりと魔法陣のような記号と文字の集合体が描かれ、それは青白く不気味な光を放っていた。  
異世界。

そのような言葉が和樹の頭に浮かぶ。  
魔法陣の描かれた城門など聞いた事が無い。  
そもそも、中世ヨーロッパで魔術はご法度だ。  
魔女狩りは17世紀……中世後期から近世の出来事だが、中世初期

の時点で既に魔術は異端とされていた。  
そのような異端を城壁に描くことなど天地がひっくり返ってもありえない。

描けばすぐにでもヴァチカンか政府に連絡されて領主や描いた人物は追放、処刑される。

ここは現代でも、地球でも無い。

全く異なる世界。

つまり、ここから家に帰る事は出来ない。

二度と元の生活に戻る事は出来ない。

和樹の頭をその考えが埋め尽くし、そのショックで和樹の意識は吹き飛んだ。

。

## 第2話 異世界・転移（後書き）

誤字・脱字の指摘や評価・感想お待ちしております。

### 第3話 小部屋・対面

「……は？」

和樹が瞼を開いた時、目に飛び込んで来たのは炎が燈されたランプと石造りの天井だった。

部屋は直径5メートル程度の円筒型。

壁にはショートボウ（短弓）やロングソード、クレイモアなどの武器類や、チェインメール（鎖帷子）、プレートメール（板金鎧）が立て掛けられている所を見ると、兵士の詰所か何かだろう。

そこまで把握出来ているにも関わらず和樹は混乱の極みにあった。

自分はこんな良く分からない部屋に来た覚えは無い。

……来た覚えは——無い。

無い——筈だ。

そこで、あの景色が脳に投影される。

怪しげな魔法陣が無数に描かれた城壁。

もしかすると、ここはその城壁の内部で、自分はそこに運び込まれたのではないか。

そんな考えが頭をよぎる。

「目が醒めたみたいだな」

瞬間、和樹は再度のパニックに陥った。

さっき見回した時には人なんていなかったし、していた音はランプ

の炎が奏でる小さなパチパチという音だけの筈。

一体この声の人物はいつの間にこの部屋に入ってきたのだろう。  
和樹が声の方向へと顔を向けると、そこにあったのは、つい先程見たばかりの板金鎧だった。

周りを見たとき、鎧に気を取られてその中に人がいるのかを確認していなかった。

いや、恐らく無意識に確認するのを避けていたのだろう。

「全く、丘の上で気絶してるものだから驚いたよ。にしても、何処から来たんだ？」男が尋ねる。

和樹はなんとか心の状態を平静に戻し、どう答えるべきか思案に入る。

まさか『異世界から』などと言う訳にはいかない。

まず信じて貰えないだろうし、最悪精神病院行きになる可能性もある。

しかし、下手に地名や方角を言つて自爆するのは避けたい。

こちらの場合スパイと疑われ処刑台行きになる可能性すらある。

かといって黙秘すれば更に怪しまれる事は必須。

3択で、全てが自爆の危険性を孕んでいる。

「……」

考えているうちに、どうやらかなりの時間が経過したらしく、男が口を開いた。

「……訳あり、のようだな」

和樹はその言葉の次に手錠が出るか、それとも剣が出るか、と身構えていた。

しかし、続く言葉はそれとは正反対だった。

「まあ、この街には訳ありの連中は多いし、追及するつもりは無いさ。俺だって元々は『訳あり』だったしな」

あまりのあっさりさに軽い脱力感を覚える程だった。

しかし、これで最初の危機を脱する事が出来た。

「それで、この街に来た理由は何だ？ それは言って貰わないと、入城と滞在の許可証を出せないからな」

理由——そのようなもの、ある訳が無い。

たまたまここに来ただけ。

だが、そのような理由で許可は出ないだろう。  
それならば。

「求職に来ました」

一番オーソドックスな答えを選ぶしかない。

確かに和樹は高校生で、年齢の割に背は低めだが、理由としてはそれほどおかしくはないだろう。

「求職か……しかし、この街にはそれ程割のいい仕事は無いぞ。まあ、その辺にあるチンケな街より仕事が多い事は保証するが」

男も特に気にした様子は無く、懐から取り出した用紙に何かを書き込んで行く。

とりあえず、第一関門は突破したようだ。

「次は名前を頼む」

「名前は和樹ですけど……苗字の方は言わなくても？」

「苗字？ ああ、別にいい。重複の苗字が多すぎて判別がかえって難しくなるだけだからな」

男は更に何かを書き込み、和樹に質問する。

「最後に年齢を頼む」

「多分、16歳だと思います」

それを聞いて、男は紙に数字のような物を書き入れ、近くのテープ

ルに置いてあつた印鑑を押し、和樹に手渡す。

「これで一応短期滞在の許可証になっているが、期限は7日だから、延期したくなつた場合メインストリートにある役所で長期滞在の許可証を作成してくれ。あと、役所の前にある職業案内所に行けば日雇いの仕事くらいならすぐに見つかる筈だから、それで宿代を稼ぎながら安定した職業を探せばいい」

一体何故？

何処の馬の骨とも知れない怪しげな少年である自分に何故ここまで親切にしてくれるのだろう。

この男には『仕事だから』と言う義務感が一切見られない。

かと言って、親切の代名詞のような人間にも見えない。

そんな事を考えていると、どこからか鐘の音が鳴りはじめる。

「おっと。もうそろそろ朝市が始まっちゃう」

男は和樹に手を差し出しながら言った。

「役所までなら案内してやってもいいが、どうする？」

「じゃあ、お願いします」

和樹はベッドから起き上がり、男の手を掴む。

きつと、大丈夫だ。

いつか絶対に、ここから元の平穏に戻る事が出来る。

和樹は先が全く見えない中だというのに、何故かそんな予感がした。

### 第3話 小部屋・対面（後書き）

誤字・脱字や文法におかしい表現の指摘、評価・感想お待ちしております。

#### 第4話 職業選定・市街

部屋を出た先には非常に長い廊下があった。

壁に取り付けられたランプの光に照らされながら先へと進んで行く  
と、一番奥には3メートル程度の鉄扉が鎮座していた。

恐らく分厚さもかなりあるだろうそれを男は軽々と開いた。

その先にあった物。

それは、和樹のいた現代世界と変わらない生活だった。

勿論、此処には機械やコンビニ、自動車などの文明の利器は存在しない。

だが、間違いなくここには何者かに操作されている訳では無い、本物の生活がある。

ゲームのようなイベント用オブジェクトなどは一切存在しない。

そして何より、ここはポリゴンで作られた3D空間などでは無かった。

この街も、そこに住む人々も、全てに生活感があった。

土や砂に塗れた石畳や使い込まれ、日に焼けて所々欠けている酒樽。  
粗末な木の棒と麻布で作られた日よけ、数十年以上使われていそうな傷だらけの木製テーブル。

今は朝市の時間帯で、幅6メートル前後の大通りには人が溢れかえっていた。

魚売りの威勢のいい声がこだまし、それに負けじと八百屋が声を張り上げ、酒屋は客と値段交渉で揉め、花屋は馬に花瓶を蹴られて悲鳴を上げる。

自然な生活がここにはあった。

「そう言えば名前、何て言うんですか？」

和樹は先導する男に尋ねた。

名前を呼ぼうとして、まだ聞いていない事を思い出したからだ。

「……ハルト。ハルト・ラウデイスだ」

男——ハルトは何故か少し躊躇った様子で言った。

「あれ？ 確か判別しにくいから苗字は言わないでいい、って言うてたような……」

和樹の言葉に頷きながらハルトは答えた。

「ああ、確かに言った。しかし、一応俺の実家は子爵家だからな」  
ハルトの説明によると、平民階級は住んでいる都市名や地域名が苗字となり、貴族階級は王家から与えられた苗字を使用する、のとことだった。

地域名や都市名の場合重複がとてつもなく多くなり、事務作業が面倒になるため戸籍などにも苗字は書かれならしい。

しばらく通りを進んで行くと、巨大な広場に出た。

奥行きは恐らく100メートル以上、横幅は150メートル以上はあるだろう。

地面には大通りに使われてる御影石の石畳では無く、大理石のタイルが敷かれている。

最も奥の中央部にあるのは幾つもの細い柱を組み合わせた二つの塔と巨大な円形のステンドグラスが特徴的なゴシック建築風の壮麗かつ堂々とした建物だった。

その建物を挟み込むように太い円柱が特徴的なロマネスク建築風の建物が佇んでいる。

「あの建物は？」

和樹はゴシック建築風の建物を指差してハルトに尋ねる。

「ん？ ああ、あれは、ブラウ（青の）大聖堂だ。6年前に一度火事で焼失してな、今の建物に変わったのはつい最近だから分からない人が結構多くてな……」

ハルトは頭を掻きながら答える。

しかし、和樹にそのような事が分かる筈が無い。

当たり前のように答える事から此処の人間にとって常識的な事なのだろう。

それを聞き返せば怪しまれる事は避けられない。

そう考え、和樹はこの話を流す事にした。

「そう言えば、役所は何処ですか？」

「役所は大聖堂の左手の建物、右手の建物は職業案内所と銀行、捜査局が入ってる」

「捜査局？」

「落とし物とか、泥棒に遭った時に届け出ればその調査をする所だ」

警察みたいな所か、と納得して広場を直進して行く。

「まずは職業案内所に行った方がいいだろう。職業さえ決まれば就業滞在証を作れるようになるからな」

ハルトは和樹を先導して聖堂右の建物へ入る。

入口の正面にはインフォメーションセンターがあり、右には大量の椅子と手続き用と思わしきカウンターが並んでいる。

左は30畳程の空間に幾つもの掲示板が並べられており、掲示板には所狭しと紙が貼付けられている。

和樹とハルトはまず左の掲示板を見に行く事になった。

掲示板に貼られている職業案内は殆どが日雇いの土木作業で、他に

は聖堂の大掃除を手伝ってくれ、だとか役所の書類焼却の手伝いなどしか無い。

ちなみに、和樹は文字を読める筈も無いのでハルトが一枚ずつ読み上げていった。

そして、1時間以上かかり、最後の1枚になってしまった。

「えーと、レストラン『ヴァイス・プフェールト（白い馬）』。先月コックの一人が出産のため休職して人手が足りずに困っています。料理の経験がある方、ここで働いてくれませんか？ 期間は1ヶ月程度の予定ですが、腕が良ければ期間延長もありえます。また、格安での住居貸し出しも行っています。時給は2・5ズイルバー（日本円換算でおよそ1100円）です……」

「それだ！」

叫んだ瞬間、回りの視線が一斉に和樹へと向く。

「……すいません」

和樹は恥ずかしさに赤面しながら小さく頭を下げる。

しかし、これまでの中で最も良い仕事だった。

給料はこの手の仕事ではかなり高く、更に住居も同時に取得出来る。最大の問題は料理の経験だが、それについても問題は無い。

小学校のクラブ活動ではじゃんけんに負けつづけ、残っていた家庭科クラブに入り、女子に弄られながらも6年生の時には絶妙な味のハヤシライスを作り上げ、中学校時代から今までは両親が共働きになったため毎日の夕食を自分で作っていた。

つまり、料理経験はかなりある。

これなら大丈夫だ。

そう考えた和樹はその紙を掲示板から引き剥がし、カウンターへと歩き始めた。

#### 第4話 職業選定・市街（後書き）

更新遅くなり申し訳ありません。誤字・脱字や文法におかしい表現の指摘、評価・感想お待ちしております。

## 第5話 帰路・異変（前書き）

更新が遅れに遅れ、誠に申し訳ありません。

遅れた理由については諸事情あるのですが、申し開きをするつもりはございません。

これから少しずつ更新スピードを速めるつもりですので、どうか、応援お願い致します。

私の別作品についても近々連載を再開させるつもりです。

## 第5話 帰路・異変

いつの間にか、三カ月が経過していた。

結局、和樹はその卓越した料理技能を買われて『ヴァイス・プフェールト』に採用された。

二度の契約更新を経て、生活にも余裕が出てきたところだ。

未だに元の世界に戻る方法は見つからないものの、和樹は少しずつではあるがここでの生活に順応しはじめている。

この日も、いつも通りの日常だった。

早朝に出勤して開店の準備を行い、開店後はひたすら料理を作り続ける。

今日は客足が途絶えるのが少し遅かったため、外が真っ暗になってしまったのが少し憂鬱ではあったが、それだけだ。

店長の「お疲れ様」と言う声を聞きながら店を出る。

真っ暗だと思っていた割に、外は明るかった。

ふと空を見上げると、そこには完全に満ちた蒼い月が遙か地上を見下ろしていた。

暗闇の中で帰宅せずに良いことに安堵の息をつき、和樹は家への道を辿り始めた。和樹の家は街の南西部の住宅地区にあり、中央通り東寄りの『ヴァイス・プフェールト』からは少し遠い。

道が長いと和樹は暗闇の中帰るのが嫌だったのである。

十四、五分歩いた頃だろうか。

和樹は周りの空気が突然冷たくなったように感じた。

今は初夏で、夜とはいえ気温はそれほど低くないはずだ。

それなのに。

何だ、この肌を刺すような強烈な悪寒は？

いや、悪魔に頬を舐められたかのような身体全体に冷気が広がっていくような感覚、とも言えようか。

これ以上進むな。

脳のどこかが和樹に働きかける。  
進めば、何かが終わってしまう、と。

しかし、和樹は歩みを止めなかった。

まただ。

前、その声に従ったがためにここに連れて来られたのではないか。  
あの時、走らなければ今もまだ普通の高校生だっただろう。

ならば。

ここに立ち止まれば致命的な事態に巻き込まれる。

そう判断したのだ。

和樹の足はいつの間にか早まっていた。

早くここを抜け出さなければ、次は死ぬかもしれない。  
そう思うと、自然と足が早まってゆく。

まだ和樹は気付いていなかった。

自分が、またしても同じ過ちを犯していることに。

家まではまだかなりの距離があるが、曲がるのは数十メートル先に  
ある十字路を残すのみだ。

これで、致命的な事態からは解放される……  
その時だった。

カキン、と。

何か、金属がぶつかり合うような音が聞こえてきたのは。

## 第6話 蒼月・月下乱舞

カキン、と。

金属がぶつかり合うような音。

その音を聞いた瞬間、和樹の心臓は凍結した。

ここにいるのはまずい。

直感めいたその予測に頷きつつも和樹はとにかく金属音の正体を突き止めるべきだ、と判断を下し、十字路へと遅々とした速度で近づいてゆく。

和樹はすぐにその判断が誤りであったことに気づく。

鋭い、鈍い、また鋭い。

連続した金属音が静まり返った街の十字路にこだまする。

間違いであることに気づきつつも和樹はその足をじりじりと前に進めていく。

そして。

見えた。

蒼の月を天に仰ぎ、二人の剣士が対峙している。

和樹は慎重に、対峙する二人を観察する。

黒いフード付の外套を羽織り、巨大な剣……恐らくはブロードソードであろう、を握るかなり背が高い男と、それに比して身長が低い、赤い外套……いやドレスを身に纏い、片手剣か両手剣、どちらか分からないが刀身が波打っているところを見るにフランクベルク系統の剣だと思われる、を握る少女だ。

二人は円を描くように体を横に滑らせながら相手の動向を観察する。

ゆっくり。

冷静に。

慎重に。

先に動いたのは男だった。

和樹が目で追えないほど高速で飛び出し、大剣を少女に向かって振り下ろす——！

その直前、少女は自らの剣を大剣に真正面からぶつかる場所に構える。

確実に折れる。

和樹は直感し、数瞬後に現れるであろう、少女の両断された姿を想像して目を伏せる。

しかし。

和樹が目を開けた時点で攻防は次の局面を迎えていた。

剣を弾かれたらしい男が飛び退き、少女が追撃する。

猛烈なスピードで放たれる剣技。

鋭い切り下ろしから始まり、左からの切り払い、切り返し、袈裟斬り、右からの切り払い、また切り下ろし。

体勢をまだ立て直していない男はその猛攻に大剣で強引に防御することしか出来ない。

強度的に明らかに劣るフランベルク刀身のバスタードソードはしかし、一切の傷も受けていない。

それに対して男のブロードソードはその剣によって無数の傷を刻んでいた。

少女は更に追撃を加え、少女の勝ちを決したかのように見えた……がやがて体勢を立て直した男は少女の剣を打ち払い、反撃に移る。全体重を加えた猛烈な振り下ろし。

少女はこれを受けるのは無謀と悟ったのか右方向に跳躍、回避体勢に入る。

しかし。

男はそれを待っていたかのように剣を反転させ、回避体勢にある少女に向かって豪速の切り払いを放つ。

少女は驚愕した様子で体を捻り回避しようとするが時は遅く、男の剣は少女の腹部を薄く抉った。

ドレスが破れ、血飛沫が舞う。

少女は着地後もう一度後ろに跳躍、男と距離を取り、剣を正眼に構え——男は何かに気づいたのか慌てて少女の後を追った。

少女は何かを口走り——変化は直後だった。

少女の剣が揺らめき、焰が迸る。

それを見た男は咄嗟に飛び退き、少女に言った。

「チッ、聖剣の力を使われれば勝てるはずがない。今回の勝負は後に預けよう。さらばだ、『元』公爵息女殿下」

そう言い放つと男は十字路の『東部』に向かって走り出した。

和樹は見た。

男が自分のいる場所に向かって来る姿を。

そして、交錯。

「……見物人がいたとはな。俺の戦いを見られた以上、この秘密は墓場まで持つて行って戴かないと、な」

男は和樹に対して無造作に大剣を振り上げ、それを――振り下ろした。

その瞬間、和樹と男の間に割り込む影があった。

燃え盛る火焰の剣、赤いドレス。

先ほどまで男と戦っていた少女が男の大剣をバスタードソードで食い止めている。

「私との戦いを途中で投げ出して、一般市民に危害を加えないでくださる？ そんなに死ぬのがお望みなら、今すぐにでも冥界に送って差し上げますわよ」

微妙に貴族風の言葉遣いが残る口調で少女は言った。

「く……対聖剣装備が無い今、貴様に勝つ事は叶わぬ、か。仕方あ

るまい。市民よ。近々冥界への使者が迎えに来るだろう。それまでに人生を楽しむことだな」

男は言った後、次は本当にこの場を去った。

「さて」

少女が呟く。

「あなた、どうしてこんな場所に？」

蒼い月は、いつの間にか天の中心まで上がっていた……

## 第7話 静寂・誓い

天空には蒼い月と無数の星々。

それを見上げる都市のとある十字路で、座り込んでいる少年と剣を握った少女が向かい合っていた。

「あなた、どうしてこんな場所に？」

赤いドレスに身を包んだ少女が和樹に尋ねてくる。

この時、和樹は初めて少女の顔を見ることが出来た。意外に幼い。

自分より年上か同い年くらいだと思っていたが、恐らくは年下だろう。

そして、和樹がこれまで見た人間で、最も美しかった。

卵型の整った顔には薄い桃色のふくらした唇と通った鼻筋、理知的ではあるが意志の強さを思わせるエメラルドのように透き通った翠瞳が絶妙なバランスで配置され、紅葉色のショートヘアはその美しさをさらに引き立てる。

肌は雪のように白く、少女が着る純色の赤のドレスと最高のコントラストをもたらしている。

少女の持つ剣は、柄にドラゴンの意匠が施され、獰猛でありながらも美しかった。

和樹は、その美少女を前に、もはや茫然とすることしか出来なかった。

「え、あ……家に、帰る途中だったんだ」

和樹はどこか夢心地で少女の問いに答えた。

「……そう。災難だったわね。私たちの闘いに巻き込まれて」

「……いや、首を突っ込んで見たのは俺だし、君のせいではないよ」

「……いいえ。違うわ。あなたは闘いを見たせいで既に致命的な事態に襲われてるもの」

言った少女に、和樹は疑問の目を向ける。

確かに相手の男に殺されかけたが、しっかり助けてくれたし、相手も逃げたではないか、と。

「何でだ？」

それに対して少女は溜め息をつきながら答える。

「あのね、そう簡単に忘れてくれればこっちも苦労しないわよ。まさか一度防いだけで相手が諦めてくれる訳無いでしょう？」

その言葉を聞いて、和樹は気づいた。

男はまだ、死んでいないことに。

死んでいるならば最早和樹が何らかのトラブルに巻き込まれる可能性は皆無に等しいが、いまだ相手は生きている。

つまり、男が去り際に言った通りに『殺される』のだ。

その考えに至って初めて和樹は事態の重大さを悟った。

今まさに、この世界に投げ出され、必死に作ってきた平穩が音を立って崩れ落ちているのだ。

「……俺は、一体どうすればいいんだ？」

誰に聞く訳でもなく、半ば虚ろな目で和樹は呟いた。

「……あなた、武器は使えるの？」

少女がその言葉に返答をした。

「いや、剣なら多少は振れるけど、とても実戦には堪えないよ」

「……そう」

少女はしばらくの間考える仕草を見せ、和樹に言った。

「私に付いて来る？」

「え？」

和樹は疑問詞で少女の言葉に応じる。

「正直、武器も使えない人間を連れて行きたくはないけど、ここで死なれても見捨てたみたいで後味が悪いし。危険だけど生き残る可能性のある逃亡と、一見安全だけどその前には死しかない平穩、どちらを選ぶ？」

少女は真剣な目で和樹を見つめ、返答を待っている。

和樹は突然提示された選択肢に戸惑い、過去最大の深いパニックに陥っていた。

それを何とか奥に沈め、少女に返事をした。

「……俺は平穩を選びたい。でも、状況がそれを許さないなら、仕方がない。危険を冒してでも生きる道を選ぶ」

少女は和樹の言葉にゆっくりと頷いた。

「なら、まずはこれからの事を相談しないといけないわね。宿を取ってあるからそこで……」

「いや、俺の家を使ってくれ。取りに行きたいものもあるし、宿は『敵』にマークされている危険もあるだろうし」

「確かにそうだけど、私も取りに行きたいものがあるし……あなたの家ってここからの位離れている？」

「殆ど離れていない。すぐに着くけど」

「分かったわ。とりあえずあなたの家に行きましょう」

「了解。……っと、そう言えば君の名前は？」

未だに名前を聞いていないことを思い出した和樹は少女に尋ねた。

「エレナ。エレナ・ランドブルクよ。あなたの名前は？」

「和樹。瀬戸和樹だ」

少女……エレナは和樹に手を差し出し、言った。

「これから宜しく、カズキ」

和樹もそれに応じ、エレナの手を握る。

「色々迷惑かけると思うけど、よろしくな、エレナ」

和樹とエレナの真上には蒼色に輝く月が佇んでいた……

## 第8話 家・最後の平穏

数分後、和樹とエレナは煉瓦造りの古びた集合住宅の前にいた。

「ここだ。二階の三号室が俺の家になつてゐる」

玄関にはランプが吊され、黒ずんだ木製扉はこの住宅の年齢を如実に表している。

和樹が扉を開けて中に入るとエレナもそれに倣い玄関をくぐった。

右手側にある階段を上がり、奥に進むと『？・？』の文字が入った扉が見えてくる。

和樹は扉に真鍮の鍵を差し込み、回した。

鍵の外れる音と同時に扉が開け放たれる。

和樹は中に入り、エレナが入るのを見ると即座に扉を閉め、鍵をかけ直した。

無意味ではあるが、尾行を警戒したのだ。

和樹はエレナをダイニングに迎え入れ、椅子に掛けるように促した。この家は一ヶ月三十ズイルバーという格安にも関わらず日本というところの2LDKという破格の物件であった。

ダイニングには黒檀のテーブルが置かれ、五つのランプによって明るく照らされていた。

エレナが椅子に座ると和樹はキッチンの氷冷蔵庫に保管してあった紅茶を二つのグラスに注ぎ、テーブルに置いた。

和樹が椅子に座ると、エレナは紅茶を一口啜り、とりあえず、と前置きした。

「この街からは出ないといけないわ」

和樹は頷き、分かつてる、と返した。

「出発するのは明け方がいいと思うわ。一刻も早く街を去りたいけれど、真夜中は門が閉じるし、捜査局員に捕まったら目も当てられ

ないから」

「それには賛成だけど、出たとしてどこに行くんだ？俺は周辺の地理を殆ど知らないから提案も出来ないし」

そう、和樹はこの街に来てからは一度も城門をくぐっていなかったのだ。

「東部のラズトリア王国国境地帯にある旧マインストリア帝国帝都ベリエザラム、北西三十エルダ（一エルダはおよそ八キロメートル）付近にある帝都アリストリア、南部のロアステリア伯ワルアサーデ領の街セレイアの三つ」

「待った。名前を言われても地理に疎いから全く分からない。特徴を言ってくれないか？」

「了解。セレイアはこの町よりもかなり小規模な地方都市で率直に言えば田舎。そして、アリストリアは帝都の名の通り周辺で最大の都市。人口は二十三万人。最後のベリエザラムは……規模的にはアリストリアよりも大きいけれど、世界最大規模のスラム街。治安は最悪で衛生状態も劣悪だけれど隠れるのにこれ以上適した場所はない」

和樹はそれを聞きながらそれぞれの街を想像する。

田園に囲まれた牧歌的で自然豊かな地方都市。

中央に巨大な城が鎮座し、様々な建物が統一的に整理された大都市。崩落したかつての帝城の周りに建物が無思慮に配置され混沌としたスラム。

そうした想像の街を歩いていき、和樹の意見は一つの都市に固まった。

「帝都に行こう。スラムは元が危険過ぎるし、地方都市だとバレれば即座に包囲される。治安がよくてかつこの街より大きい所を選ぶべき。だから帝都がいいと思う」

和樹のその言葉にエレナは多少驚いたような表情を浮かべた。

「なかなか慧眼のようね。私も帝都に行くのが最善手だと思う。治安レベルは最高で大きさもこの都市、タイラメリアの五倍以上。

隠れる場所には不自由しないしね。但し、もし道中で見つかった場合は旧帝国帝都のスラムに潜伏する。それでいい？」

エレナの言葉に和樹は強く頷く。

「構わない。ただ、これまでに旅なんてしたことがないから何を持って行けばいいのか分からない。アドバイスをお願い出来るか？」

「アドバイス？別にいいわよ。最低限必要なのは丈夫で動きやすい衣服と靴、護身用のナイフか剣、火打ち石、寝袋、水筒。あつた方がいいものは包帯と薬草、替えの服みたいな衛生関連の物品ね」

そのアドバイスで和樹は気づいた。

どう考えてもエレナが着ているドレスは動きやすいとも丈夫だともいえないように見える。

「ちよつと待った。エレナが今着ているその服、どう考えても動きやすくも、丈夫でも無いように見えるんだけど」

和樹の疑問にエレナはああ、と言いながら返答した。

「これはいわゆる魔術兵装よ。私の剣は属性が焰だから反属性の水で編まれた戦闘専用の服を着てるの。流石にあの温度だと魔術兵装を使わないと剣を持つ人間が先に焼死してしまうし。かなりの高級品だから不要な時は使用者が水属性の魔力を注げば結晶化して縮んだり、結構便利なのよね」

エレナ曰く、『旅装は別に持っている』らしい。

本当は出来る限り早く街を離れたかったが、旅の準備が整っていないため滞在を一日増やして明日に和樹の旅の準備を行う事になった。エレナは空き部屋の一つで眠ることになり、和樹は自分の部屋でいつもより早い、しかし最後の平穏な眠りについた――

同時刻。

アインスタ・クレイヴ第二帝国、帝都アリストリアは深い闇に包まれていた。

季節特有の濃霧に街は飲み込まれ、至る所に設置された街灯さえもその光を地に届かせる事が出来ないでいた。この街で最も巨大な建造物である帝城はそれでも圧倒的な存在感を持ってそこに屹立していた。

数十に渡る高い尖塔に強固な対魔鋼鉄製の城門、数千はあるように見える大量の窓からは明かりが漏れ、所々には大砲さえもが据え付けられている。

しかし、無骨な外見に反して内部は豪華かつ絢爛だった。

エントランスは吹き抜けで開放感があり、水晶製のシャンデリアが吊られている。

その奥にはドラゴンと剣、オリーブの葉……帝家の紋章が大量の寶石で扉に描かれていた。

その更に奥には、帝国第三皇太子、アスリム・トルキア・アインスタ・ベルムの私室がある。

「そうか、ラスティムは仕損じたか」

その中から、若い男の声が漏れてくる。

「いや、問題はない。あの『聖剣』はまだ覚醒を迎えていないからな。ああ、取りあえずは監視要員だけでいい」

声は声変わりを迎えた直後のような若干濁った音だ。

「しかし、ラスティムでさえ殺せないとは、どうやらかなり強くなっているようだ。次の攻撃では一個中隊を使え」

ランプの明かりが微妙に揺れ、壁に陰影を作る。

「いや、そうではない。流石にもう諦めている。彼女は帝国建国以来最大級の災厄なのだからな。エレナ・フォン・ルシエール・セラ・クレイヴ・リアス・ランドブルク。かつてのクレイヴ家督継承者にして現代で十指に入る魔力量を持つ、アインスタ家の宿敵。もう、かつての関係には戻れないのだよ。次は、『確実に殺せ』。分かったな」

そこで、声は途切れた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3882g/>

---

紅の平原と蒼の騎士

2010年10月10日03時26分発行